『賞奇軒墨竹譜』の板木

金子貴昭（日本学術振興会特別研究員）
E-mail tkaneko@fc.ritsumei.ac.jp

要旨

宝暦十年（一七六〇）に刊行された池大雅の画譜『賞奇軒墨竹譜』は、板木・板本・出版記録が揃って現存している。これらの資料は、類板・相合板・板木の売買・板木の分割所有・分割所有した場合の摺り・明治期以降の木版印刷・板木の再利用といった出版研究のキーワードを雄弁に物語るものである。最新の板木研究の動向をも織り込みつつ、『賞奇軒墨竹譜』の板木が初版から奈良大学博物館に収蔵されるまでにたどった経緯を追い、近世出版の実態を垣間見る。

abstract

Gafu "Shokiken Bokuchikufu" by Ike no Taiga published in 1760 completes woodblocks, books, and publishing records today. They clearly show us keywords of researching about publishing in Edo period, for instance, Ruihan -a kind of pirated edition-, a publishing in partnerships, fractional ownership of woodblocks, woodblock printing in the case of fractional ownership, woodblock printing after Meiji period, recycling woodblocks, and so on. Tracing the route that woodblocks of this book followed from the first edition to holding by Nara University Museum,we will be able to catch facts of publishing in Edo period, interweaving latest trends of researching japanese printing woodblocks.

はじめに

筆者らは、奈良大学所蔵板木資料を中心に、近世期の商業出版に関わる板木の調査およびデジタル・アーカイブ構築を行っており、従来、研究資料として取り扱うことが困難であった板木を出版研究に活用する試みを行っている。その試みや技法については別稿の準備があり、[1]そちらを参照されたい。デジタル・アーカイブは、二〇〇九年度中に公開が始まる予定であり、[2]未だデータが十分に整わない部分もあるが、全点の板木資料をデジタル画像で閲覧することができるようになる。

近年、永井一彰氏によって精力的に報告が行われているように、板木には、板本を閲覧しただけでは分かり得ない情報が多く含まれている。それらの情報については、筆者も別稿[3]において述べる予定であるが、これまで板本中心に行われてきた出版研究に板木資料を持ち込むことにより、新たな視点を獲得することが期待できる。しかし従来、閲覧が比較的容易な板本とは異なり、板木資料は原物を扱うことはもちろん、複写資料を作成することも困難であり、十分に活用されてこなかった。昨今のデジタル技術の普及により、板木資料をデジタルカメラで撮影し、インターネットを通じてフルカラー画像で板木資料が閲覧可能になったのである。これが今後の出版研究にとって極めて重要な動きとなることは間違いない。

さて、池大雅の画譜は、従来数種が確認されているが、大雅の生前に成立したものとしては、宝暦頃刊『名花十二種』と宝暦十年（一七六〇）二月に佐々木惣四郎と柏屋宗七の相合板で刊行された『賞奇軒墨竹譜』の二点が知られている。そのうち『名花十二種』は、延享元年（一七四四）刊の大岡春卜画『詠物史画』の板木流用であり、大雅の手によるものではないことが相見香雨によって指摘され、『賞奇軒墨竹譜』は、大雅が生前唯一直接的に関与した画譜と認定された。[4] また信憑性は別として、高葛陂が記した序文中に、大雅が唐本を得て、それを自ら写し、また自身の手によって板木を彫った旨が記されることから、「大雅が揮毛生活の一角の真相を伝えた最も信用のある資料」[5]ともいわれる。しかし全体的に本書の所蔵情報は乏しく、平成に入り、林進氏により個人所蔵の善本が紹介されるまで、「まぼろしの画本」と呼ばれ、稀覯本と見なされてきた。[6]

現在、『賞奇軒墨竹譜』の板木は、全揃いの状態で奈良大学博物館に所蔵されている。奈良大学所蔵板木資料の核は竹苞書楼や藤井文政堂といった古書籍商の旧蔵資料であるが、前者は寛延四年（一七五一）に創業した佐々木惣四郎であり、後者は文政頃（一八一八～一八二九）創業の山城屋佐兵衛であり、両者とも近世京都における有力な板元であった。詳細は後述するが、紆余曲折を経て本書の全ての板木は佐々木惣四郎の管理下に収まり、それらが平成十七年（二〇〇五）に奈良大学博物館へ収蔵されたのである。永井一彰氏が述べられるとおり、当時の出版機構の有り様に鑑みて、板木が全揃いの状態で現存するのは稀[7]であり、本書の板木が全て現存することも、極めて幸運といえるだろう。幸い、今回の調査中に板本数種を調査することもでき、佐々木惣四郎の出版記録も参照することができた。筆者に美術史研究の立場から本書について述べる準備はないが、出版研究の立場から本書の板木、板本、出版記録の三つを合わせ考えた時、本書は類板・相合板・板木の売買・板木の分割所有・分割所有した場合の摺り・明治期以降の木版印刷・板木の再利用といった出版研究のキーワードを雄弁に物語るのである。以下、本稿では、最新の板木研究の動向をも織り込みつつ、本書の板木が初版から奈良大学博物館に収蔵されるまでにたどった経緯を追い、近世出版の実態を垣間見る。

1 『賞奇軒墨竹譜』の板木

奈良大学博物館に所蔵される『賞奇軒墨竹譜』の板木は次の四丁張板木十二枚である。

表1 奈良大学博物館所蔵『賞奇軒墨竹譜』板木一覧（単位：cm）

板木番号	丁付	横寸	縦寸	厚さ
T0965	（序文２丁）、（裏未刻）	73.4	22.4	2
T0469	一、二、三、四	79	21.2	1.9
T0043	五、六、七、八	77.6	21.7	1.8
T0386	九、十、十一、十二	76	22.1	2
T0541	十三、十六、三十七、四十、（扉）	76	21.4	1.9
T0963	十四、十五、三十八、三十九	76.1	21.4	2
T0925	十七、十八、十九、二十	77.4	21.2	2
T0790	二十一、二十二、二十三、二十四	76.3	21.8	1.8
T0784	二十五、二十六、二十七、二十八	75.7	21.5	1.8
T0785	二十九、三十、三十一、三十二	76.2	21.5	1.8
T0600	三十三、三十四、三十五、三十六	87.5	25	0.9
T0964	（跋文２丁）、（題簽）、（袋）、（刊記）	75.8	21.1	1.7

まずこの表のみを見て気づくことは、T0600の板木の縦横ともに寸法が際立って大きく、薄いことであろう。先にふれた別稿において詳述するが、一点の出版物の板木を集めた場合、おおむねサイズが統一的であることが多い。また、厚さが1センチ前後の板木は、不要になった板木の表面を削って再利用した板木であると考えられる。さらに、永井一彰氏によれば、板木の両端に取り付けられる反り止めには、時期による変遷が認められるが、[8] T0600とそ

れ以外の板木では反り止めの型式が異なる。型式の上では板木の両端を凸型に加工し、そこに反り止めを被せて側面から釘打ちして固定するT0600の型（A型、図1）が古く、T0600以外の、板木の両端をレール状に加工し、反り止めをスライドさせてはめ込む型（B型、図2）は比較的新しい。時期的には元文・寛保頃までA型が用いられ、次第にB型へ変遷していくと考えられる。『賞奇軒墨竹譜』が刊行された宝暦十年はB型の時代であり、ここでもT0600の異質さは際立つ。これら板木の一般的な傾向をもとに考えれば、T0600の板木は他の十一枚の板とは成立事情が異なり、また比較的古い板木を再利用して彫られた板木であると推定できる。このことを含めて、記録や板本などと突き合わせればより詳細なことが分かってくるが、詳細は後述することとする。

図1 T0600の反り止め型式（A型、奈良大学博物館所蔵）

図2 T0469の反り止め型式（B型、奈良大学博物館所蔵）

2 出版記録

幸い、『賞奇軒墨竹譜』の刊行事情に関する詳細は、佐々木惣四郎の出版記録『竹苞楼大秘録』に記録されている。以下、それを所収する『若竹集』[9]により、関係箇所を抜粋する。引用中、○囲み数字及び傍線は筆者によるが、**（付箋）**、「」等の指示は引用書によった。

一、賞奇軒竹譜

右、①柏ヤ宗七殿ト此方相合ニ致、此節八種画譜差構在之ニ付、則左之通証文扣也

一札

一、賞奇軒墨竹譜　一冊

右、②此度新刊ニ仕候ニ付、其元御所持之八種画譜ニ差構候旨御申被成、承知仕候、然ル処、右差構之分抜候而者、全本ニ相成不申候故、此度御相談申、其侭ニ而板行致候様ニ御了簡被下、忝奉存候、然ル上者、③右之板行出来仕候次第、板木一枚差遣シ申候、尤、承之此方両家より摺候節ハ、壱部ニ付板賃壱分ツヽ之以積相渡シ申候、為後証一札仍如件、

宝暦十年辰三月

銭ヤ惣四郎
柏ヤ　宗七

④坂本ヤ藤兵衛殿

⑤当時、画譜板木持主、新町通五条上ル東側玉屋喜兵衛殿也、

⑥摺ニ可遣折、板墨持参事、硯ハアリ

（付箋）「

⑦八種画譜板元玉屋喜兵衛殿

右画譜、日野屋源七殿吹挙ニ而、三貫八百目ニ吉野屋為八殿へ買得、

安永七戌年二月之事也

」

一、⑧林伊兵衛殿ニ十竹斎画譜板行出来候へハ、賞奇軒竹譜に差構在之、出来本五分請取、相対ニ而則証文別ニ有、

宝暦十年庚辰三月廿一日

〆、

一、⑨賞奇軒竹譜　柏宗相合板木　数六枚　代五匁
右、吉野ヤ七兵衛殿板木市ニ而買得、
明和七年寅十月廿二日市
当時丸板
⑩内一枚、八種画譜板元ニ有、卅三丁目ヨリ卅六迄板一枚、渡シ置、
丸板賃、次銀壱匁壱分也、内壱分ハ留板之板賃、
外ニ丁数、扉・奥書共ニ四十六丁
袋
〆、
（付箋）「
三ツ折　六分五厘　一四也　摺手間　壱分弐厘　廿五なり
板賃　壱分　片折　三厘五毛
同内ノ　壱匁弐分　表し　弐分五厘
〆、次二匁三分五厘
」

3　『賞奇軒墨竹譜』の刊行事情

（1）刊行直前の諸事情、類板のこと

2章の傍線部にそくして、本書の刊行直前の経緯を追うと次のようになる。[10]

①『賞奇軒墨竹譜』は佐々木惣四郎と柏屋宗七の相板で刊行予定であったが、④坂本屋藤兵衛がその内容に②『八種画譜』への差構いがあること、つまり類板であることを申し出た。類似箇所を抜けば刊行しがたく、坂本屋藤兵衛に相談したところそのまま刊行しても良いと了解された。類板問題は③本書出来次第に、板木一枚を留板として渡し、本一部につき壱分の板賃を渡すことで決着した。宝暦十年三月のことである。⑧同月、林伊兵衛刊の『十竹斎書画譜』が『賞

図3『八種画譜』竹譜十四

図5『八種画譜』竹譜二十三

図7『八種画譜』竹譜十六

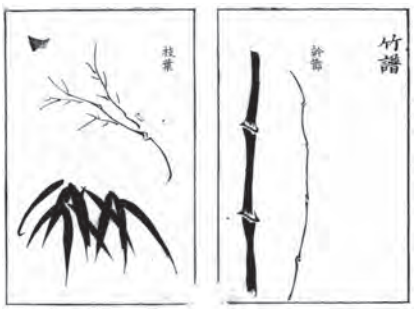

図4『賞奇軒墨竹譜』一オ、一ウ
京都大学附属図書館所蔵（大惣本）

図6『賞奇軒墨竹譜』十九ウ～二十オ
京都大学附属図書館所蔵（大惣本）

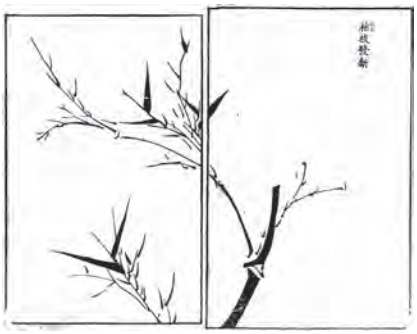
図8『賞奇軒墨竹譜』八ウ～九オ
京都大学附属図書館所蔵（大惣本）

奇軒墨竹譜』に差構いのあることが分かり、佐々木が『十竹斎書画譜』の出来本五部を受け取ることになった。

さて④の坂本屋藤兵衛については、どのような板元かよく分からない。しかし『八種画譜』との関わりから推測すれば、山本藤兵衛を指すのではないかと思われる。山本藤兵衛は宝永七年（一七一〇）より『八種画譜』を刊行していた板元であり、『賞奇軒墨竹譜』刊行直前の宝暦九年（一七五九）、『八種画譜』から「梅竹蘭菊譜」のみを独立させ、『新鐫梅竹蘭菊四譜』（都立中央図書館等所蔵）として刊行したその人である。つまり、『賞奇軒墨竹譜』が『八種画譜』の類板にあたるという故障を申し立てるのにふさわしい人物だった。

次に「差構」について具体的にみる。例えば図3、図4は一面の絵を二面に割り振って描いた事例、図5、図6は片面の絵を見開きに描いた事例、図8「枯枝発新」は図7の「枯枝発生乗」を左右反転し、さらに枝を伸ばして描いた事例。これらを含めて列挙すれば、『賞奇軒墨竹譜』の一オ、一ウ、二オ、二ウ、三オ、三ウ、四オ、四ウ、五オ、五ウ、六ウ、七オ、七ウ、八オ、八ウ、十オ、十一オ、十二ウ～十三オ、十四オ、十九ウ～二十オ、三十二ウ～三十三オ、三十七ウ～三十八オが『八種画譜』の内容に抵触している。まさに傍線部②「差構之分抜候而者、全本ニ相成不申候」の状態であった。とはいえ、本書は直接に『八種画譜』に拠ったわけではない。実際には唐本『賞奇軒四種』に拠っていることは林進氏が指摘されるとおりである。[11] 周知のように『八種画譜』とて唐本の和刻本であり、それぞれの原本や依拠本の内容に、もともと重なりがあったのである。そのあたりの事情が全く考慮されていないこと、または主張すらされていないことは注意すべきであろう。

この点をさらに追求すれば、傍線部⑧も同様である。類板問題の処理方法として、必ずしも留板によらず、出来本を渡すことで解決を図る例のあることはすでに指摘がある。[12] この林伊兵衛刊『十竹斎書画譜』は『賞奇軒墨竹譜』の直後に出来し、特に『賞奇軒墨竹譜』の一～六丁にかけて、明確な内容の重なりが認められる。『十竹斎書画譜』は唐本の和刻本であって、決して『賞奇軒墨竹譜』を模倣したのではない。『賞奇軒墨竹譜』が『八種画譜』の内容に抵触した例を含め、それぞれ依拠した唐本に内容の重なりがあったのであり、当然当事者間においてもそれぞれが直接の依拠関係にないことは理解されていただろう。しかしこれらの記録では、依拠関係は全く問題とされておらず、刊行の先後関係が問題となっていることをうかがうことができよう。版権は「著作権にも似た強大な権利」[13]ともいわれる。むろん重板の場合には著作内容やその依拠関係など著作権的なものが問われるであろう。『賞奇軒墨竹譜』はごくわずかな一例でしかないが、江戸期を通じて出版界に頻出した類板について、依拠関係はさておき、刊行の先後関係が重視されていた実態が端的にがうかがえる事例である。

さて『竹苞楼秘録』[14]によれば、『賞奇軒墨竹譜』の「上ケ本」が済んだのは宝暦十年四月二十四日。「上ケ本」は、出来本に版権認可の添章とその際に提出した願写本を添付して公議に提出する一連の出版手続きの最終段階であるから、上述の経緯を経た結果として、実際の刊行は刊記の記載より二ヶ月遅れたらしい。こうして類板問題は落着したが、板木はさらに移動していくことになる。

（2）板木の移動、板前のこと

傍線部⑤によれば、時期は未詳であるが、坂本屋藤兵衛のもとにあった留板一枚は、その後玉屋喜兵衛の所有するところとなった。傍線部⑦において「八種画譜板元玉屋喜兵衛殿」と記されていることから、『八種画譜』の版権とともに留板が玉屋へ移動したものと思われる。また傍線部⑦では安永七年（一七七八）二月に『八種画譜』の版権が玉屋から吉野屋為八へ移動したことが付箋で示される。『八種画譜』の版権移動が付箋で注記してあるということは、ここでも『八種画譜』の版権移動に伴い、留板一枚も吉野屋へ移動したと見るのが自然であろう。当然といえば当然であるが、これらの記録には、先行書の版権が移動すれば、それに伴ってその類板の留板も一緒に移動していく様子がよく表われている。

さてその間、傍線部⑨において、佐々木と柏屋で持ち合っていた板木にも移動が生じる。明和七年（一七七〇）十月、吉野屋七兵衛が催主をつとめる板木市に、柏屋が『賞奇軒墨竹譜』の持ち板六枚を出品し、佐々木がそれを代五匁で購入したのである。板木市で佐々木が柏屋から得た板木が六枚であるから、全十二枚から引き算して、残りの板も六枚になる。したがって当初予定されていた佐々木と柏屋の板前が一対一、つまり二軒の一軒前ずつであったことが分かる。さらには坂本屋藤兵衛に差し出した留板が佐々木の持ち板であったことも判明する。明和七年十月の段階で、坂本屋藤兵衛と玉屋のいずれが留板を所有していたのかはっきりしないが、留板一枚を除く板木十一枚は佐々木の手もとに集まっていた。

傍線部⑩によって、坂本屋藤兵衛に渡った留板の丁付が記されており、本来、佐々木の持ち板とする予定だった一枚が表1のT0600に相当する箇所だったことが分かる。それ以外は佐々木と柏屋がそれぞれどの板を持ち合っていたか、記録には明示されていないが、板前に関して詳細に考察された永井氏の指摘が参考になろう。

近世後期の出版界にあっては、相合版の出版物の板木を何軒かで分割所有する場合、その板前は「同じ巻が一つの店に集中しないように」「出来るだけばらして」するという原則があったことが一応は確認できたのではないかと思う。また、もともと板木を仕立てる際に、分割所有するということを前提に、中抜きの丁飛ばし仕立ての板を作っておくことも行われていた[15]。

永井氏は、複数巻にわたる書の事例を考察され、板木を調製する際に、必ずしも丁を丁順どおりに板木に収めるのではなく、丁順をわざと崩して板木に収めることにより、相合の相手が一巻のみを勝手に刊行することができないよう、互いに牽制しあう構図を指摘されている。永井氏の指摘を念頭に表1に戻ると、T0541とT0963は、丁付がまばらが収まっており、「丁飛ばし」に該当するといえる。相板の場合は、複数巻に渡るケースのみならず、本書のような一巻一冊本においても同様の操作が行われていたことを指摘できよう。十二枚全ての持ち合い方は完全には分からない。しかし少なくともこの二枚の板木は、佐々木と柏屋いずれか一方が所持していたのではなく、一枚ずつ持ち合っていたことはほぼ明らかである。

（3）留板の行方

佐々木が近代以降も本書を刊行していたことは、後に述べる近代摺板本の存在、および佐々木が明治四十年（一九〇七）頃に刊行した『書林竹苞楼蔵版略書目』[16]に「賞奇軒墨竹譜　全一冊」と記載されることから明らかである。とすれば、先に再利用の板木であることを推定したT0600の調製時期がいつだったか、なぜ新たに調製が必要だったかが問題となろう。先に確認したとおり、『竹苞楼大秘録』傍線部⑦の記述により、安永七年二月に吉野屋為八へ留板が渡っていたことは先に確認したとおりである。しかし吉野屋為八の活動は文化八年（一八一一）過ぎに終焉すると考えられ[17]、その後の留板の所在が明らかではない。このことは、最近永井氏が紹介された佐々木の蔵板記録『蔵板員数』[18]が明らかにしてくれる（ゴチックは引用書による。後筆の意）。

一　賞奇軒竹譜　拾二枚

但丸板

三拾三より三拾六

四丁河喜留板出

大正五年八月河喜へ照会の処

不明ニ付此方ニテ刻足ス

刻賃四丁張一枚四円也

〆四拾壱丁　扉奥書

袋外題

これによると、大正五年（一九一六）八月以前、留板一枚は河喜（河内屋喜兵衛）の手に渡っていた。河内屋が吉野屋から直接に入手したのか、あるいはいくつかの板元を渡り歩いて最終的に河内屋に行き着いたのか、その間の経緯は不明であるが、佐々木の照会によって行方不明となったことが判明し、佐々木によっ

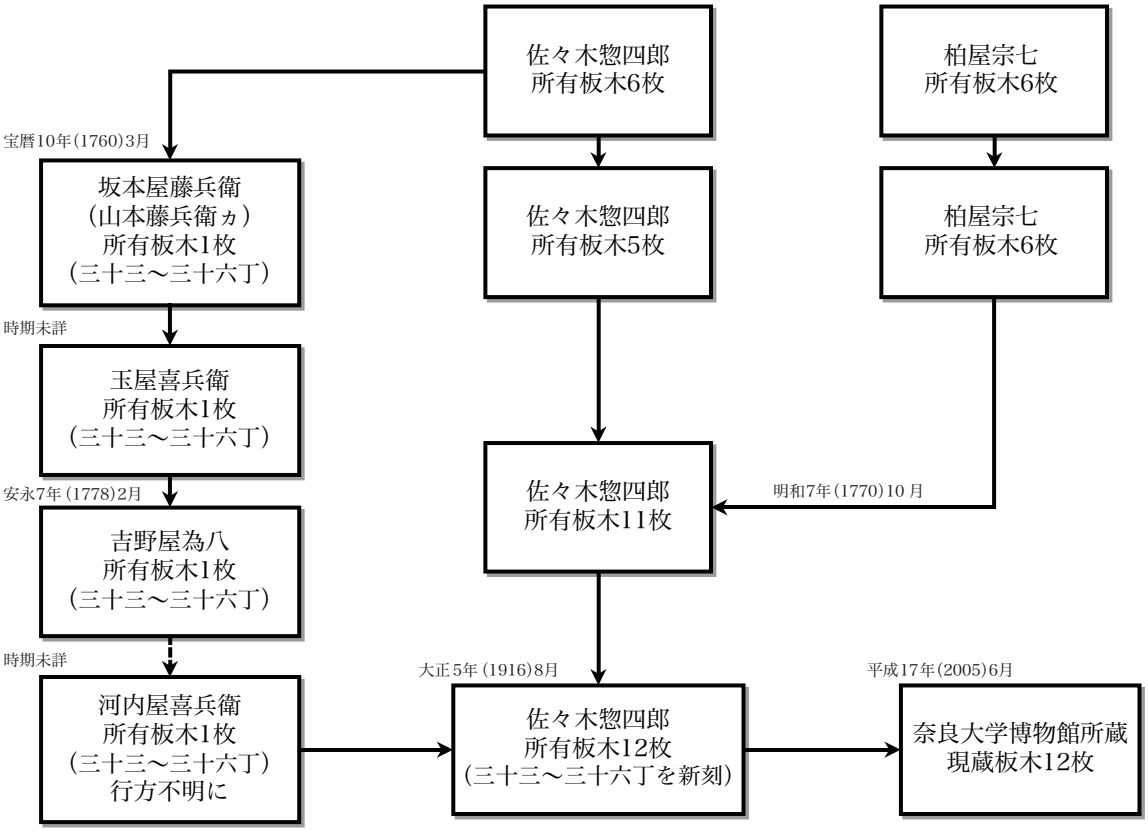

図9『賞奇軒墨竹譜』の板木移動経路

て新たに彫り足されたのである。T0600の板木は墨付きが浅く、新たに彫り足されたそのものであることは明らかであろう。こうして板木の外形から行った、T0600が他の十一枚と成立事情が異なるという推定は、記録で裏付けが取れたことになる。大正五年、佐々木が『書林竹苞楼蔵版略書目』に掲載した書の出版体制を強化したことは、すでに別稿において述べたことがあるが、[19] T0600の新刻もその一環として行われたことなのだろう。ともかくも大正五年八月、ようやく佐々木の元に全ての板木が揃い、時を経て平成十七年(二〇〇五)六月、奈良大学博物館へ収蔵されることとなる。初版から現在まで、本書の板木十二枚がたどった経路は、およそ図9のようになる。

(4) 分割所有した板木の摺刷

これらの記録には、本書の刊行経緯以外にもうかがえる点がある。例えば、板木が分割して所有された場合、どのようにして一点の書を摺刷するのか、漠然とした疑問が浮かぶ。分散した板木を一箇所に集めて摺ることが、相合の本来の目的に反し、非現実的であることは想像に難くないが、従来聞き伝え的に、摺師が板木のある場所に出向いて摺るということが一般にいわれてきた。傍線部⑥は留板一枚の摺刷に関する注意事項が記録されたものであるが、「摺ニ可遣折」の表現は、摺師が板木の保管場所へ出向いて摺っていたことの証左となろう。このような記事は珍しいが、他に安永七年刊『千金方薬註』の例を見出すことができる。

『千金方薬註』は松岡玄達が著わした薬学書である。本書も類板や玄達自身の借入金をめぐって複雑な刊行事情を抱えていたことが『竹苞楼大秘録』『竹苞楼秘録』の記事からうかがえる。いま概略のみを記せば、当初、佐々木惣四郎が「蔵板支配人」として板木を調製、刊行し、著者玄達自身が蔵板者となる予定であったが、上述の経緯から佐々木を含めた相合板となり、玄達の板前も半分以下に留まった。記事中、その玄達所蔵分の板木の摺刷について、「松岡板摺ニ可遣節、硯墨持参之事」との指示がみえる。

玄達は蔵板者であって、板元ではない。したがって、摺刷の道具や材料が揃っておらず、玄達所蔵の板木を摺る際に、硯や墨を持参しなければ摺刷できないということは理解しやすい。話を『賞奇軒墨竹譜』に戻し、傍線部⑤では、玉屋喜兵衛は「板元」と記されているが、傍線部⑥において「板墨持参事」とされている。玉屋には摺刷に必要なものが揃っていないようであること、玉屋喜兵衛の出版活動歴がつかめないことから、いわゆる書林ではないか、蔵板者的な板元のようにも思われる。いずれにせよ、これらの記事が、摺師が板木のある場所へ出向き、硯や墨は相合の相手先のものを使用して摺刷するという当時の実態の裏返しであることは間違いない。その他の相合板の事例について、特に摺師への注意がないことも、そのような考えを強くさせる。本書の刊行経緯に直接関わることではないが、その調査を契機として、従来それとなくいわれてきたこと—摺師が板木のある場所に出向いて摺刷する—が記録上からうかがわれる重要な箇所と考え、本稿中で述べる次第である。

4 『賞奇軒墨竹譜』の諸本

以下に、八本の諸本を列挙する。

1. 京都大学附属図書館所蔵大惣本（8-44ト3。以下、大惣本）
大本一冊。薄鼠色表紙（改装）。元題簽欠。内題「竹譜」。表紙見返しに「東坡遺意」。裏表紙見返しに刊記「怡顔斎蘭品　近刻／宝暦庚辰二月／平安書舗　佐々木惣四郎／清水宗七」。柱題「竹譜」（但、序・跋には柱題・丁付なし）。池大雅画。高葛陂序。安濬子深跋。丁数44丁。（序2丁）、一～四十、（跋2丁）。四十ウは白紙。

2. 東京K氏所蔵本（以下、K氏本）
未見。林進氏により、次のように紹介される。[20]
美濃判（縦27.4糎×横18.3糎）一冊で、袋綴じ和装。序文は二丁、竹譜は四十丁、跋文は二丁、扉題は半丁（おもて表紙裏に貼付け）、奥付は半丁（うら表紙裏に貼付け）。表紙は薄藍色で、貼題箋には篆書で「賞奇軒墨竹譜」と墨刷りされています。（中略）見返しの扉には「東坡遺意」とあり、これは中国の清時代の康熙年間に刊行された『賞奇軒四種』のうちの一冊、「東坡遺意」のその扉題をそっくり摸刻したものであります。なお右の引用中には刊記に関する記述がないが、図版によって刊記が示され、大惣本と同一の刊記が付されていることが分かる。

3. 立命館大学アート・リサーチセンター所蔵甲本（arcBK01-0034。以下、ＡＲＣ甲本）
大本一冊。薄藍色表紙、元題簽「賞奇軒墨竹譜」（単郭）。内題「竹譜」。刊記なし。表紙見返しに「東坡遺意」。柱題「竹譜」（但、序・跋には柱題・丁付なし）。丁数43丁。序2丁、跋2丁、一～四十。ただし四十オは裏表紙見返し扱い。渡辺私塾文庫旧蔵。

4. 秋田県立図書館所蔵本（72-シンイチ／39／。以下、秋田本）
大本一冊。元題簽欠。表紙様、表紙・裏表紙の見返し、丁順などＡＲＣ甲本と同様。

5. 立命館大学アート・リサーチセンター所蔵乙本（arcBK01-0017。以下、ＡＲＣ乙本）
大本一冊。薄藍色表紙、元題簽「賞奇軒墨竹譜」（単郭、図10）。表紙見返し「賞奇軒墨／竹譜／平安　竹苞楼／至徳堂」。裏表紙見返しに刊記。ただし大惣本の近刊予告を削る。柱題「竹譜」（但、序・跋には柱題・丁付なし）。丁数44丁。（序2丁）、一～四十、（跋2丁）。大惣本などの表紙見返し「東坡遺意」はＡＲＣ乙本の四十ウにある。

6. 立命館大学アート・リサーチセンター所蔵丙本（以下、ＡＲＣ丙本）
大本一冊。薄茶色表紙、元題簽「賞奇軒墨竹譜」（単郭）。表紙見返し、刊記はＡＲＣ乙本と同。四十ウは白紙。扉「東坡遺意」はＡＲＣ丙本には見られない。明らかな近代摺。

7. 相見香雨旧蔵本（以下、相見本）

未見。相見香雨により、次のように紹介される。[21]

本は縦八寸八分、横六寸、萌黄色表紙で、貼題簽には篆書で『賞奇軒墨竹譜』とある。風姿凡ならず。見返しの扉題も題字もなくて、初頁から高葛陂の「刻東坡画竹譜序」と題する文が四頁に亘ってある。

8. 三村竹清旧蔵本（以下、竹清本）

未見。三村竹清により、次のように紹介される。[22]

東坡画竹譜、美濃本一冊、扉に東坡遺意とある、私の本は外題が逸して無いから、何といふ書名か判然せぬ、東坡遺意といふのかと思ふが、序に刻東坡画竹譜序とあるから、仮に今東坡画竹譜として置く。

図10　ARC乙本表紙、題簽
*2

本書が佐々木惣四郎と柏屋宗七の相合で刊行されたことは、先に記録によって確認したとおりであるが、それは刊記の記載内容からも確認できる（図11～13）。また刊記に見える『怡顔斎蘭品』の近刊予告の存在から判断して、大惣本・K氏本の摺りが比較的早いことが推察される。佐々木・柏屋が板木を分割所有していた頃の摺りであろう。『怡顔斎蘭品』は明和九年（一七七二）六月の刊行であり、『賞奇軒墨竹譜』刊行時から十二年先の近刊予告が出ていることになる。『竹苞楼大秘録』や『竹苞楼秘録』によれば、『怡顔斎蘭品』は唐本屋八郎兵衛が刊行する予定で官許を得たが、刊行しないまま廃業、宝暦六年（一七五六）五月に佐々木惣四郎が版権を買い請けた後も、何らかの事情によって、出来まで実に十六年以上の年月を費やしている。おそらく当初は『賞奇軒墨竹譜』刊行後まもなく出来の予定だったのだろう。

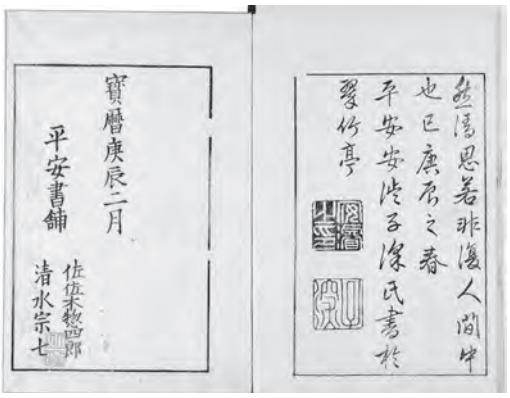

図 13 ARC丙本跋２ウ～裏表紙見返し（刊記）

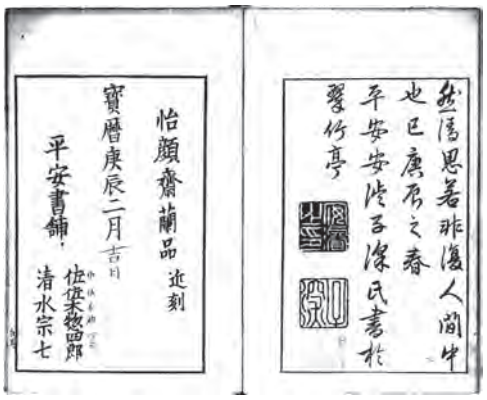

図 11 大惣本跋２ウ～裏表紙見返し（刊記）

図 14 奈良大学博物館所蔵板木 刊記（T0964、鏡像）

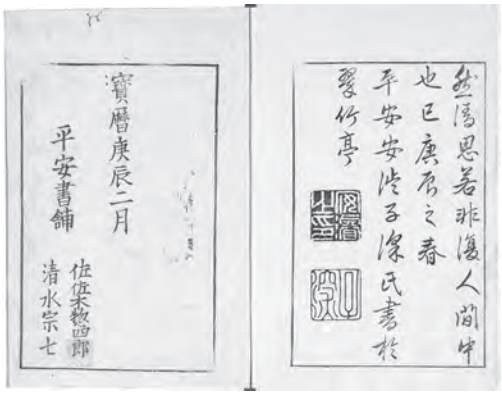

図 12 ARC乙本跋２ウ～裏表紙見返し（刊記）

ＡＲＣ甲本には刊記がなく四十オが裏表紙見返しとなり（図15）、序文の直後に跋文がくる（図16）という異様な丁順である。一見、後人による改装が施され、刊記が落ちたり、誤綴されるなどの結果に至ったものかと思われるが、秋田本が同一体裁であることから考えて、原装を保っていると考えるのが適当と思われる。大惣本のように四十ウが白紙（図17）となることを嫌ったのか、あるいは後摺本ゆえに刊記を省くことを企図したのか、意図は明確ではないが、四十オを裏表紙見返しと見なした結果、跋文の行き場がなくなり、後序の位置に置いたのだろう。なお、欠刻の状態や摺りの善し悪しから判断して、ＡＲＣ甲本および秋田本は同時期の摺りであり、それらは大惣本より後摺り、ＡＲＣ乙本よりも摺りが早い（図18～21）。特にＡＲＣ乙本以下、格段に摺りが悪くなる。

一方、ＡＲＣ乙本では刊記が復活しているが、『怡顔斎蘭品』の近刊予告は削られている（図12）。もちろん、現存の板木は近刊予告を削ったものである（図14）。このことが、『怡顔斎蘭品』の刊行が延引し、近刊予定ではなくなったことを意味するのか、あるいはＡＲＣ乙本が『怡顔斎蘭品』刊行後の摺りである

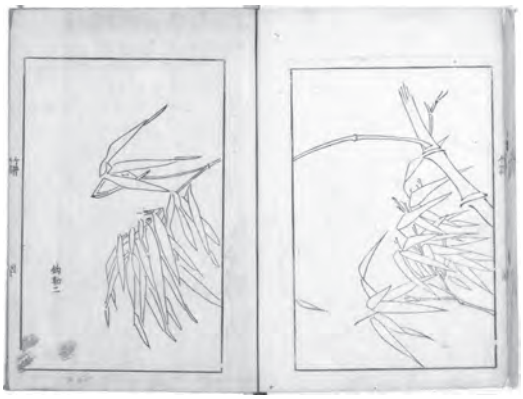

図15 ARC甲本三十九ウ～四十オ（裏表紙見返し）

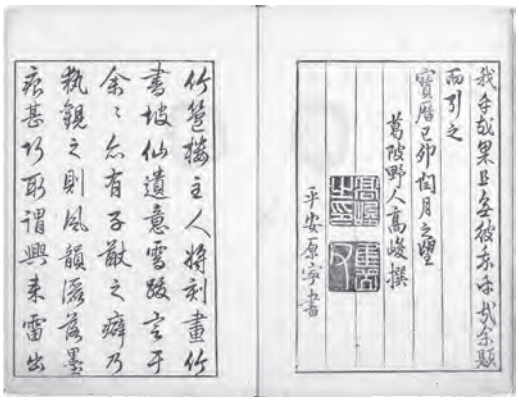

図16 ARC甲本序２ウ～跋１オ

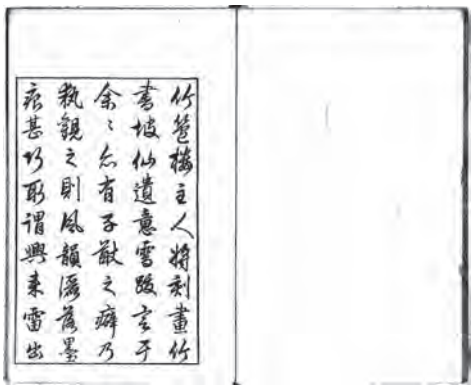

図 17 大惣本四十ウ～跋１オ

図18 大惣本（上）六ウ、（下）七オ

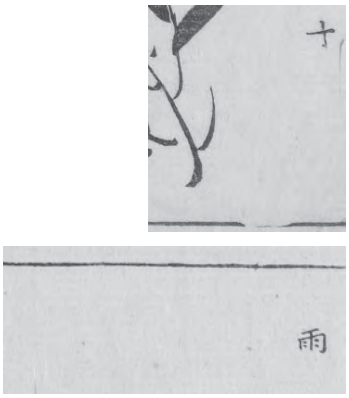

図19 ARC甲本（上）六ウ、（下）七オ

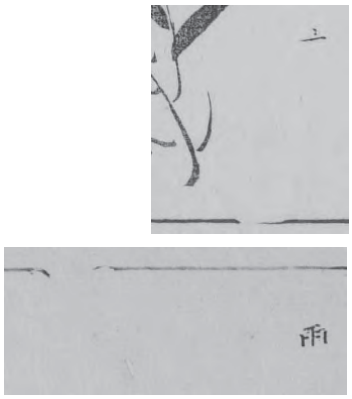

図20 ARC乙本（上）六ウ、（下）七オ

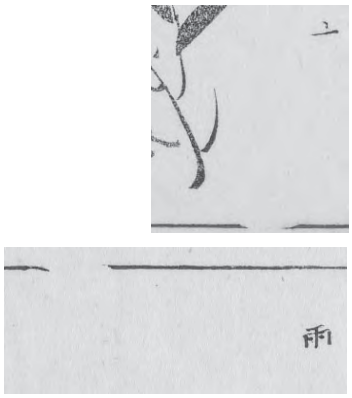

図21 ARC丙本（上）六ウ、（下）七オ

ことを意味するのか明確ではない。しかしＡＲＣ乙本は、後摺本であるＡＲＣ甲本や秋田本よりさらに摺りが遅く、初摺から相応の時期を隔てた後摺本と考えられるため、ひとまず明和九年六月以降の摺りと見て良いだろう。版権の移動に絡めていえば、刊記の「竹苞楼」印とも考え合わせ、袋（表紙見返し、図22）および刊記（図12）に柏屋の名を残してはいるが、留板を除く十一枚の板木が佐々木の所有に帰した後の摺りになるだろう。

ＡＲＣ乙本の表紙見返しの扉は袋板で摺られたものに差し替えられており、大惣本やＡＲＣ甲本で表紙見返しにあった「東坡遺意」の扉（図23）は、ＡＲＣ乙本では四十ウの位置に置かれている。四十オと四十ウのバランスは悪く、柱が四十オの側にせり出している他（図24）、四十ウの版面はノド側に寄ってしまっている（図25）。この操作はＡＲＣ甲本や秋田本と同様、大惣本のように四十ウが白紙となること（図17）を嫌った可能性があろう。または、袋と表紙見返しの扉が同板であることは珍しくないが、[23] 先に袋と見返しを摺ってしまい、結果、本来の扉の行き場がなくなり、四十ウの位置に収めた可能性もある。しかしこの丁順には、板木の構成も関連している。

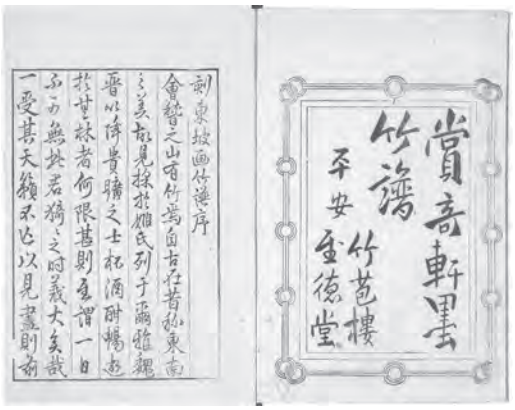

図 22 ARC 乙本表紙見返し～序１オ

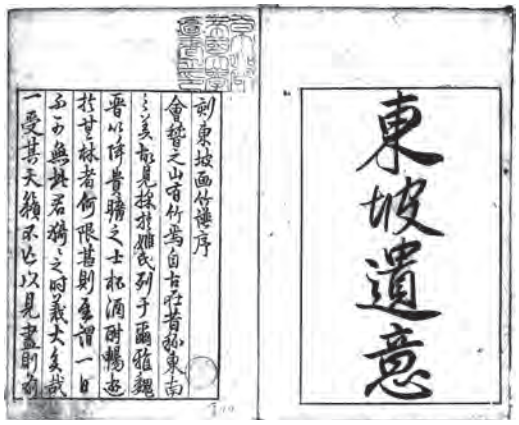

図 23 大惣本表紙見返し～序１オ

板木の構成について、近世には一般に「本文末尾が半端になった場合は、題簽・袋と組み合わせるという仕立て方が多く採られたこと」が永井氏により指摘されている。[24] 本書の題簽・袋はＴ０９６４の跋文２丁の裏に、刊記とともに彫られていることは表１に示したとおりである。Ｔ０５４１は十三、十六、三十七、四十の四丁分を収めるが、四十丁は表しかない。したがってＴ０５４１の板木には半丁分のスペースが余る。本書の場合、そこを活用して半丁分のスペースしか必要としない扉が彫ら

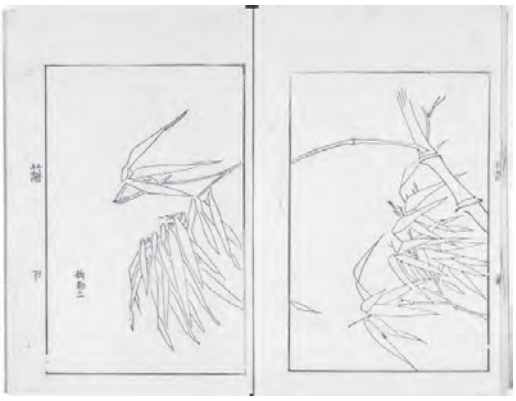

図 24 ARC 乙本三十九ウ～四十オ

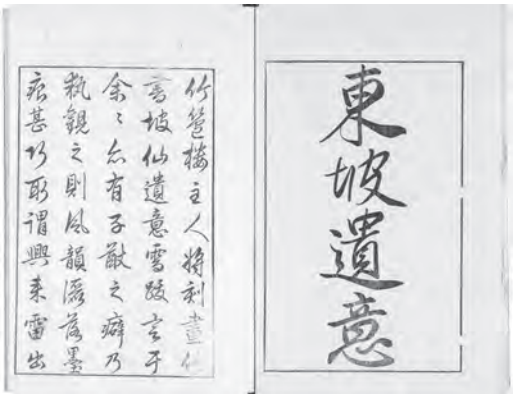

図 25 ARC 乙本四十ウ～跋１オ

図 26 奈良大学博物館所蔵板木（T0541、鏡像）四十オ、扉

図27 大惣本三十五ウ～三十六オ

図29 ARC乙本三十五ウ～三十六オ

図28 ARC甲本三十五ウ～三十六オ

図30 ARC丙本三十五ウ～三十六オ

れている（図26）。四十丁は半丁ながら柱があり、柱と扉の刻面の間には適度な余白が設けられている。ARC乙本はこの板木の構成どおり扉を四十ウと見なしたのである。永井氏は同稿において、こうした板木の構成が乱丁を招くことを実例とともに指摘されている。ARC乙本についても、先の二つの可能性の他、単純に、誤って扉を四十ウとした乱丁である可能性もあろう。いずれと見るべきかはさておき、四丁張板木の構成を意識しつつ板本を見れば、ARC乙本の乱丁には、扉が四十丁の隣に彫られているという事実が表出しているのである。

ARC丙本の四十ウは大惣本などと同様、白紙に戻されており、刊記はARC乙本と同じであるが（図13）、ARC丙本には「竹苞」印が押印されている。表紙見返しにはARC乙本と同様、袋が流用されており、「東坡遺意」の扉は姿を消している。ARC丙本は袋が現存していないが、扉は袋に転用された可能性もあろうか。

さて、留板として各板元を転々とした三十三～三十六丁の板木はあまり大切に扱われなかったらしい。特にARC甲本以降、ARC乙本までの諸本は、匡郭の欠損が激しく、留板の所有板元のもとで痛んでしまったようである。一方、この留板と同じ丁を収めるT0600の匡郭は整っている（図27～31）。また、ARC甲本やARC乙本に認められる三十六オの「釣」の字の欠刻、三十四ウの竹の葉の先の欠刻が、T0600には認められない（図32、図33）ことからも、ARC乙本以前に摺られた諸本がT0600の板木によるものでないことは明らかであろう。そしてそれらT0600の特徴を備えるのがARC丙本（図30、図32、図33）である。板木の移動にそくしていえば、ARC丙本は全十二枚の板木が佐々木の所有となった大正五年八月以降の摺りであることが分かる。

なお相見本、竹清本については現在の所在が判明せず、[25] 調査が叶わなかった。それぞれの典拠に記された解題と図版のみでは十分な位置付けができないが、その他諸本により、全様はつかめるものと考える。

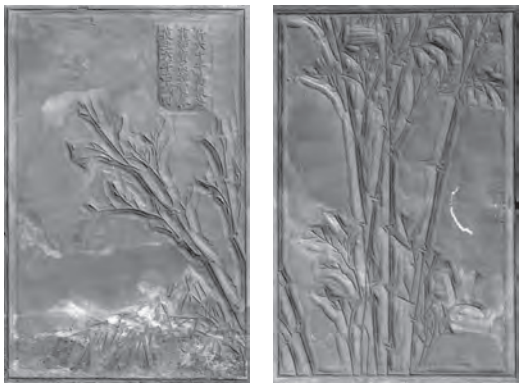

図31 奈良大学博物館所蔵板木（T0600、鏡像）
（右）三十五ウ、（左）三十六オ

図32 三十六ウ（右から大惣本、ARC甲本、ARC乙本、ARC丙本、奈良大学博物館所蔵板木T0600）

図33 三十四ウ（右から大惣本、ARC甲本、ARC乙本、ARC 丙本、奈良大学博物館所蔵板木T0600）

5　おわりに

以上、煩雑ながら『賞奇軒墨竹譜』の板木を出発点に、近世出版の現場を垣間見てきた。出版研究と称するにはミニマムな事例であるが、本書の刊行事情が伝えてくれる情報は少なくない。

語弊を恐れずにいえば、現在、出版に関わる研究において、板木という存在は板本の版面というフィルタを通し、やや曖昧なイメージとして捉えられている。そのフィルタを通してしまえば、入木や摩滅など、板木の刻面に関するイメージは比較的具体的に捉えることができるが、それに固執すると、その他の情報は脱落してしまう。その他の情報とは、『賞奇軒墨竹譜』の板木についていえば、T0600の板木の外寸であり、反り止めの形状であり、T0541に収まる丁の構成と板本の扉の位置の関係である。板本と出版記録によってよその刊行経緯は明らかにできたであろうが、これらの情報なくして、出版の現場で何が行われたかを述べ尽くすことはできない。

むろん本書のように板木・詳細な出版記録・板本が揃う資料は限られており、すべての板本に対し同様の手法で調査を行うことは不可能である。しかし、だからこそ可能な限り参照しうる板木を板本・出版記録と突き合わせ、板本を見ただけでは分かり得ない事柄を事例として提示、その事例によって板本に対する視点や板本の背後にある板木のイメージを豊かにしていくことは極めて重要であると考える。

近年、各所蔵機関において、板木研究への取り組みや資料整備が着実に進捗しつつあり、[26] 板木が広く出版研究に利用される日がそう遠くないことを予想させる。本稿中でもふれた永井一彰氏の論考や、筆者が行っている調査から明らかなように、板木が教えてくれる事実は少なくない。これらの事実を踏まえれば、刊行事情にとどまらず、それらにそって当時出版の現場で何が行われたのかをよりクリアに捉えることができるのである。本稿において、『賞奇軒墨竹譜』という一点の出版物の刊行事情や諸本の様相を明らかにできたこと自体には、それなりの意味がある。しかし、それよりもむしろ、それを追うことによって得られた、出版の現場で何が行われたのかという事例を収集できたことにより、大きな意味があると考える。そしてそれらの情報が出版研究に刺激を与えていくことは間違いないであろう。

〔付記〕
本稿は二〇〇八年京都俳文学研究会十二月例会における口頭発表に基づくものである。また文部科学省グローバルＣＯＥプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」（立命館大学）および日本学術振興会平成21年度特別研究員奨励費による研究活動成果の一部である。資料の閲覧・掲載をご許可下さった関係諸機関に厚くお礼申し上げます。
なお本稿中にあげたＡＲＣ甲本は、渡辺私塾文庫の旧蔵書である。調査の趣旨をお伝

えしたところ、渡辺淑寛文庫長は筆者に本書をご恵与下さった。筆者の所蔵に帰するより、資料の公共性を保つことが、渡辺私塾文庫の方針にも沿うと考え、立命館大学アート・リサーチセンターに登録させていただいた次第である。記して深謝申し上げます。

＊1 以下、『八種画譜』の図版は、西川寧、長澤規矩也編『和刻本書画集成』第六輯（汲古書院、一九七六年）によった。

＊2 本来、ARC甲本により示すべきであるが、題簽の保存状態が良好でなく、ARC乙本によって示した。

〔注釈〕

（1）拙稿「板木デジタル・アーカイブ構築と近世出版研究への活用」（赤間亮・冨田美香編『日本文化研究とイメージ・データベース』、ナカニシヤ出版、二〇一〇年刊行予定）

（2）立命館大学アート・リサーチセンター板木閲覧システム（http://www.arc.ritsumei.ac.jp/db9/hangi/）

（3）拙稿「板本の板木―その基本的構造―」（アート・ドキュメンテーション研究17号、二〇一〇年刊行予定）

（4）相見香雨「大雅の画譜」（日本書誌学大系45『相見香雨集』二、青裳堂書店、一九八六年）

（5）（4）に同じ

（6）林進「〔美術史料紹介〕池大雅摸刻『賞奇軒墨竹譜』一冊」（季刊美のたより115号、一九九六年）

（7）永井一彰「板木は語る―慶安三年版『撰集抄』―」（江戸文学39号、二〇〇八年）

（8）永井一彰「板木は語る―反り止めの変遷―」（東海近世正月例会口頭発表、二〇〇九・一・一〇）。また、以下に述べる型式等については、（3）の拙稿に詳述する。

（9）水田紀久編『若竹集』（一九七五年、佐々木竹苞楼書店）

（10）本節に述べる経緯の他、『京都書林行事上組諸証文標目』（彌吉光長『未刊史料による日本出版文化』、ゆまに書房、一九九四）の宝暦七年（一七五七）十二月条に「一賞奇軒竹譜ニ付　銭屋平八」（※筆者注―平八は初代佐々木惣四郎の前名・平八郎）とあることから、出版願は宝暦七年中に出されていたものと思われる。

（11）（6）に同じ

（12）蒔田稲城『京阪書籍商史』（一九六八年、高尾彦四郎書店）

（13）中野三敏他「江戸の出版 下―座談会 板元・法制・技術・流通・享受―」（『江戸の出版』、ぺりかん社）

（14）（9）に同じ

（15）永井一彰「板木の分割所有」（奈良大学総合研究所所報17号、二〇〇九年）

（16）板本の所在は知られていないが、奈良大学に板木四枚が現存している。刊行年は拙稿「『書林竹苞楼蔵版略書目』について」（俳文学研究52号、二〇〇九年）による推定。

（17）藤川玲満「吉野屋為八の出版活動」（国文108号、二〇〇七年）

（18）永井一彰『藤井文政堂板木売買文書』（日本書誌学大系97、青裳堂書店、二〇〇九年）

（19）（16）の拙稿に同じ

（20）（6）に同じ

（21）（4）に同じ

（22）三村竹清「大雅堂余話」（日本書誌学大系23『三村竹清集』六、青裳堂書店、一九八七年）

（23）永井一彰「竹苞書楼の板木―狂詩集・狂文集を中心に―」（奈良大学総合研究所所報15号、二〇〇七年）

（24）永井一彰「『おくのほそ道』蛤本の謎」（奈良大学総合研究所所報9号、二〇〇一年）

（25）相見香雨の旧蔵書は、一九八四年、九州大学文学部に寄贈されているが、現在、相見文庫に『賞奇軒墨竹譜』は所蔵されていない旨、回答を得た。

（26）杉林真由美他「明治大学図書館所蔵板木調査（中間報告）」（図書の譜11号、二〇〇七年）、「檜書店旧蔵版木目録」（神戸女子大学古典芸能研究センター紀要2号、二〇〇九年）、企画展示「近世版木展」（二〇〇九年二月十六日～三月六日、於：立命館大学アート・リサーチセンター）、企画展示「錦絵はいかにつくられたか」（二〇〇九年二月二十四日～五月六日、於：国立歴史民俗博物館）、シンポジウム「今よみがえる江戸期の源氏版木」（二〇〇九年三月十七日、於：大阪府立大学学術交流会館）等。